

情報の焦点化に関する中日対照言語研究

LD082005 劉 洋

【要 旨】

本研究は、中国語と日本語における情報の焦点化に関わる問題について論じるものである。これまで、中国語と日本語の対照研究は数多く存在するが、情報の焦点化に関する中日対照研究はあまりなされていない。類型論的には、中国語は典型的な孤立語と言われ、日本語は膠着語に分類されているが、焦点は中国語と日本語に共通して存在する概念である。焦点に関する研究は、欧米の言語でなされているものが中心で、構文論的、意味論的なアプローチからなされているものが多い。本研究は、機能論的なアプローチから、情報の焦点化する手段に着目し、中国語と日本語が共通に備えている、情報を焦点化する手段が、実際の運用の際にどのような共通点と相違点をもっているかについて考察したものである。以下は各章の概要である。

【第1章】

第1章は、本研究の目的と研究の方法について述べた。中日両言語において、情報を焦点化するのに音声的手段、形態的手段、統語的手段（構文）、統語的手段（語順）が用いられている。本研究は、中国語と日本語に共通にもっている情報を焦点化する音声的手段と統語的手段（構文）（“A 的是 B” 構文と「A ノハ B ダ」文、“(是) ……的” 構文とノダ文）を研究対象として、実際の運用の際にどのような共通点と相違点をもっているかを明らかにするのが目的である。

研究の方法としては、本研究は機能論のアプローチから、談話のレベルで中国語と日本語の情報を焦点化する手段について考察する。原則として話し言葉、または書き言葉による談話の実例を対象として分析を行う。対象となった実例は、主に新聞のニュース、文学作品、論述文、シナリオから集めたものである。分析の方法としては、記述する対象により、必要に応じて適宜質的研究と量的研究を使い分ける。

【第2章】

第2章では、焦点の定義、焦点の分類、中国語と日本語における焦点化の手段の3つの面から先行研究を概観した。

焦点とは何かについては、これまでの様々な定義を音声、情報の新旧、情報の重要度及び意味論の4つの観点に分けて紹介し、焦点の分類については、機能的な立場からの分類と形式的な立場からの分類の2つに分けて整理した。そして、中国語と日本語において、それぞれ音声的手段、形態的手段、統語的手段（構文）、統語的手段（語順）によって情報を焦点化していることを述べた。

【第3章】

第3章では、中国語と日本語における音声的手段の機能の相違点について考察した。中国語においても日本語においても、音声的強調は情報を焦点化する手段として用いられていると言われているが、実際の使用において、日本語の音声的強勢と比べて、中国語の音声的強勢の焦点化する力が弱く、機能が少ないということが分かった。

日本語において、音声的な強勢を置くだけで対比を表したり、事態実現の早さ又は遅さ、比較する基準の程度の高さというニュアンスを出すことができるのに対して、中国語においては、これらの場合、強勢だけでは表すことができず、形態的手段または統語的手段を用いる必要がある。具体的には、“是”判断文と形容詞文の前項名詞句に焦点をあてて対比を表す場合は、音声的強勢だけでは表すことができず、副詞“才”（こそ）を使う必要がある。また、未然の動作行為に対する関与項が対比する場合は、“是”を用いたほうが自然である。そして、実現済みの動作行為に対する「動作の仕手、時間、場所、方法、目的」などの関与項に焦点を当てるときに、“（是）……的”構文を使う必要がある。事態実現の早さ又は遅さに焦点を当てるときは、中国語では副詞“就”（もう）又は“才”（やっと）を用いる必要がある。比較する基準の程度の高さというニュアンスを発生させる場合は、中国語では“还”（もっと）又は“更”（更に）のような副詞を用いる必要がある。中国語において、音声的強勢は、形態や統語的な手段で既に焦点化された成分を更に強調する、自然焦点である文末成分が対比を表す、意外性を表すといった機能のみである。

【第4章】

第4章では、日本語の「AノハBダ」というハ分裂文の使用を選択する要因について考

察した。日本語のハ分裂文の選択について、砂川（1995）は「先行文脈から引き継いだ情報の配列という点に深くかかわる」として、「ハ分裂文の主たる機能は、予測可能な項を前置して、先行文脈になるべく近い位置に配列するというところに求められる」としている。これは、ハ分裂文の使用の必要条件であるが、ハ分裂文を選択する動機づけに関する十分な説明にはなっていない。本研究では、砂川（1995）の研究を踏まえて、前置要素 A と後置要素 B がそれぞれもつ情報上の特徴と継続・対比の連動性の観点から、日本語の情報を焦点化する構文手段である「A ノハ B ダ」文の使用条件をより厳密に規定した。

具体的には、A が既出情報で、B が喚起困難情報であり、かつ B が先行文脈で導入されたある不特定な事物を特定する場合は、ハ分裂文の使用が必須である。ハ分裂文が使われやすい場合は、(i) A が既出/喚起可能情報で、B が喚起困難情報である、(ii) A、B とも既出/喚起可能情報である、(iii) A が総括情報で、B が喚起困難情報である 3 つのパターンに分けた。(i) では、B の継続が主な選択要因であり、B の対比が副次的選択要因である。(ii) では、B の対比が主な選択要因で、B の継続が副次的選択要因である。(iii) では、A の継続が選択要因である。

【第 5 章】

続く第 5 章は、日本語の「A ノハだ」文と対照しながら、中国語の“A 的是 B”構文の使用について考察した。“A 的是 B”の焦点化のタイプは、先行文脈との意味関係から「特定焦点化」「特立焦点化」「対比焦点化」の 3 つに分けられる。この 3 つのタイプの焦点化は、いずれも日本語にも存在しているが、日本語の「A ノハ B ダ」文に比べて、それぞれ中国語の特徴をもっている。特定焦点化の場合、前項 A の情報量が少なく、動詞の繰り返し使用が多い。特立焦点化の場合は、前項 A が程度副詞を伴い、使役的表現や形容詞が多用される。そして、対比焦点化の場合は、表現効果を強めるために対比関係をもつ複数の“A 的是 B”を並列させるのが特徴である。

後続文脈との関係から見ると、“A 的是 B”は「主題展開」「談話収束」という 2 つの談話展開機能をもつ。この 2 つの機能も日本語の「A ノハ B ダ」文と共通にもっている。中国語においては、主題展開の場合は、後項 B が前項 A の主語のときのほうが後続文脈の主題として長く続くことが特徴である。また、談話収束の場合は、日本語においては、後項 B 情報価値が低く、自然消滅的に談話が収束しているのに対して、中国語においては、後項 B は情報価値が高く、特定または特立、対比のいずれかの形で B に重点を置いて談話を結

ぶ。

【第6章】

第6章では、焦点化される成分の偏りと談話における機能の2つの面から、情報を焦点化する機能をもつ中国語の“(是)……的”構文と日本語の「ノダ」文が論述文における使用の共通点と相違点について考察した。

焦点化された成分の面では、必須補語の焦点化は“(是)……的”構文と「ノダ」文がほぼ同じであるが、“(是)……的”構文は状況語を焦点化するのが多いのに対し、「ノダ」文は述部や文全体を焦点化する場合が多い。

談話における機能の面では、“(是)……的”構文と「ノダ」文が「対比」を表す機能を共通にもっている。相違点は、後続文脈との関係においては、“(是)……的”構文における焦点化された成分が「主題導入」機能を果たすことが多いのに対し、「ノダ」文はこのような機能をもっていない。「ノダ」文は、“(是)……的”構文に見られない「問題点の提示」機能をもっている。先行文脈との関係においては、「ノダ」文は、先行文脈から導かれた結論を提示する「結論の提示」機能を果たすことが多い。“(是)……的”構文はこの機能を果たす場合が少なく、副次的な機能である。“(是)……的”構文は、原因と条件から導かれた結論を提示したり、換言して結論を提示したりする機能をもっていない。

以上、本研究は、機能論的なアプローチから、中国語と日本語に共通にもっている情報を焦点化する音声的手段、「AノハBダ」文・“A的是B”構文、“(是)……的”構文・ノダ文といった構文的手段が実際の運用の際に、どのような共通点と相違点をもっているかについて考察した。中日両言語において、情報を焦点化するのに音声的手段、形態的手段、統語的手段(構文)、統語的手段(語順)が用いられている。本研究では、中国語と日本語に共通にもっている音声的手段、統語的手段(構文)を考察したが、中日両言語で対応していない形態的手段、とりたてを表す形式及び焦点に関わる語順の問題については今後の課題としたい。